

沖

12  
2021

俳句雑誌【おき】



# 薑

能村 研三

師系燦燦

今瀬剛一先生の「対岸」が創立三十五周年を迎えた。十月に紀年号が刊行されたが、二百四十頁に及ぶ大冊で、「三十五周年を迎えて」と題した巻頭言には、三十五年前の思いが書かれている。

十五年前、四十代の私は作句力が大変旺盛でした。自分の作品発表の場が欲しいと思いました。また私の周囲にはたくさん仲間がいます。この者たちを育てたいと思います。こうした思いから主宰誌「対岸」創刊を快意したのです。

この決意を最初に伝えたのは他ならない能村登四郎先生です。あの日の先生の一瞬だけ見せた寂しげな戸惑いの表情を今もありありと思いついています。それでも先生は次の瞬間にはつきりと言って下さいました。「やりなさい、頑張るんですよ」「私は胸が熱くなつて」「先生ありがとうございます」というのが精一杯でした。

今瀬先生は、ひと月に百句位の俳句が出来るかと水戸から車で鳩亭を訪ねてこられ、登四郎の選を受けられた。登四郎の選は大変厳しくあまり選が貰えない時は、数日後に推敲を重ねた百句をもってこられていたのを記憶している。

私は初学時代に「沖」の若手句会の「舵の会」でご指導を受けた時代がある。この時も今瀬先生は夜東京で行われる句会に労を惜しまず水戸から駆けつけて下さった。

私の第一句集『騎士』は、今瀬先生が十七頁にも及ぶ温情溢れる跋文で俳壇へ送り出して下さった。

先日、協会の用件で今瀬宅を訪問することになった。コロナ禍もあって実に二年ぶりにお会いしたのだが、お元気のご様子で安堵した。お宅で歓談のあと水戸までBMWを運転して先導され借楽園、千波湖にご案内いただいた。借楽園ではつい最近に建てられた今瀬先生の句碑も拝見した。

紅梅は水戸の血の色咲きにけり 剛一  
三角形のおむすびの形をした石にこの句が刻まれていた。

先生は私より一回り以上歳が離れているが、今なお俳句に情熱を注がれる姿勢に励まされた一日であった。

校正の朱筆奔放虫しぐれ

文机の木理渦巻く厄日かな

待宵や身ばなれの良き白身魚

照り降りのせはしき唐辛子真つ赤

真價はどうでも良しと鳥兜

昼月の吹かれぎんなん落つる日よ

十三夜壺中に水を韻かせて

何するとなく手の胡桃艶を増す

登高や身の内の靄霽らすまで

薑や山の豆腐は肌理粗き

能村 研三

## 小春日の

小春日和の日は、電話それも友人や親しい人にかける時は、外に出て庭の石などに腰掛けて話したくなる。そんな場合は当然ながら楽しい話題でなければなるまい。太陽の少し眩しいような明るさとその温かみが本当に有難いものと感じられてくる。ふと松本たかしの「玉の如き小春日和を授かりし」という句が浮かんだ。

そう言えば、登四郎先生に昭和五十六年、研三主宰の次女麻衣さんの誕生を喜び、「小春日の産湯濁らせ撥ねて孫」と詠んだ句がある。面白いことに先生とたかしの句を合わせてみると、麻衣さんがまん丸い小春日のように思えてくる。先生は取って「濁らせ」に、赤ちゃんの力強さを表現したのであろう。

小春日はまた心地よい眠気と夢想を招きやすい。夢想と言えば旅への誘い、一人無一物となつて流離つてみたくなる。やはり北の方であろうか。日本海の吠えるような風と荒波が身を引き絞る。そこまで想が膨らめば、もう小春日とのギャップは埋めきれないのである。

帰りには魚籠いつぱいの茸かな  
肩凝の母の播粉木とろろ汁  
空耳に潮騒ひびく新松子  
投網でもあらばと思ふ椋鳥の群れ  
漱石の墓に太れる秋の蠅  
放牧の牛戻りゆく花すすき  
柿日和野良の昼餉は車座に

## 蒼茫集

直感

大畑善昭

蜂の巢の平和を脅してはならぬ  
林相を読むも直感しめぢ山  
蛇穴に入る大吉の日を選び  
並べおく朴の実大山蓮華の実  
裂織の機音朴も散りつくし  
\*人もまた渋が甘みに変はる秋

うしろより

千田百里

露けしやわが家をうしろより眺め  
一粒の露として佇つ母郷かな  
訪はず訪はれず寝転んで聴く鶉高音  
籠り居の無聊やことに雁の夜は  
\*まだまだとわが胸中の吾亦紅  
星月夜さうだハイボールにしよう

まくら

埜誠一郎

\* 小三治のまくら身に入む夕べかな  
廃されし土曜郵便秋蘭  
裏表無きひととなり白桔梗  
水澄みてポプラ一樹の影流る  
十二まで数へしビート鉦叩  
回送中・実車・迎車と秋暑し

変り者

辻美奈子

\* 茸狩みんな少しく変り者  
鰯雲をさなの言葉堰切つて  
魚の身の流線形や秋の果  
人間も魔物のたぐひハロウィン  
いわし雲死者に忘れゆくごとく  
奥の間の白菊かの世より匂ふ

窯変

内山花葉

\* 窯変の力みなぎる豊の秋  
子の部屋は夫の書齋にいわし雲  
稲架解けば海鳴り近き故郷かな  
秋風の包むさみしさは透明  
鷹わたる航空母艦は動く島  
鷹匠の藍濃き羽織風に立つ

宛名窓

能美昌二郎

\* 風に纏れ風に解かるる尾花かな  
瞬きの度に波打つ蕎麦の花  
封筒に宛名窓あり小鳥来る  
朝露にふれて始めて始まる畑仕事  
不揃ひも個性のひとつ衣被  
強がりには父親ゆづり秋の茄子

思索の投網

稗田寿明

月白に待つ

須賀ゆかり

\* 放ちたる思索の投網いわし雲  
空ばかり見る秋耕の手を休め  
二日目のカレー出てくる台風過  
遠きまち遠き日のうた星月夜  
水澄みて映りし上田五千石

\* 草濡れて月白に待つ野外劇  
きしと鳴く木橋の乾き秋はじめ  
新涼や木橋は水に浮くやうに  
秋暑しがさり漢方薬の束  
磬梯の裏も表も薄紅葉

土色

鈴木光影

秋ひと日

兵藤 恵

ビルの間の五十糎に秋立ちぬ  
秋の蚊と目の合うて時緩慢に  
小鳥来る朝の底まで餌して  
\* 一本と呼ぶをためらふ鶏頭花  
秋の灯や人工都市いま土色に

\* 秋ひと日母の子として過ぎしけり  
ナビ通り進みもうひとつの花野  
鯊釣の光を釣つて帰り来る  
獣臭き肉を煮てをり文化の日  
鉄無地の父の着物や夜寒来る

包

平松うさぎ

鳥の眉間

小林陽子

水引の亀の金色菊日和  
霧の這ふ連山深き朱を抱き  
\* 銀漢や包パキの真中に煙穴  
鷹渡るミクロマクローを俯瞰して  
陽の色の浮力たわわに花梨の実

星抱く馬の眉間や秋高し  
竜骨をさらして月の港かな  
\* 黒葡萄ぶつかりながら許し合ひ  
稲つるび埴輪に大きピアス穴  
賢治忌の月の道ゆく最終便

大樹の呼吸

本池美佐子

禁制

菊川俊朗

寝に落つる刹那の冷えや夜明け前  
\* 断層は地球の敏よ牛蒡引く  
掘割の鯉の胴太水の秋  
悔いのなき人生なんて林檎剥く  
千年の大樹の呼吸星月夜

秋の浜犬にも流行り廃りかな  
\* 色鳥来みな禁制の色を持ち  
花野にも花屋のありて花を買ふ  
日の丸の行李に残る秋湿り  
天高し線路の端の車止め

初紅葉

中村重幸

唐棧

栗坪和子

秋草を大きく活けて風の部屋  
秋耕のおのが夕影削りゆく  
秋風を軌ませをりぬ舳ひ船  
初紅葉しかと地球は軌道上  
\* てんてんと秋の影つむ砂時計

水澄むや唐棧の藍よかりける  
月涼し手織木綿の見本帖  
\* そこだけが咲きしづもれり吾亦紅  
文七のかしら小さや秋扇  
うち海の昂る九月深曇

# 沖作品



## 能村研三選

福岡

伊藤 照枝

熊本

河寄 祐二

ふつつつと湧く水の輪よ秋日和  
燐寸棒久しく擦らず吾亦紅  
型押し of 題字の窪み良夜かな  
調律師の仕上げのメロディさはやかに

\* 胸筋を真南に向け刺羽発つ  
一顆にも友を訪ふ富有柿  
月光やけものの裔の糸切歯  
知合なき句友への文良夜なり

千葉

金光 浩彰

市川市

澤田 英紀

\* 火を熾す起源思はせ葉鶏頭  
\* 唐茄子に朴訥といふ重さあり  
鶴鶴に導かれゆく陽の斑道  
暁闇の霧笛響めり土庄港  
村芝居古老の笑みの簸深し  
栗駒山は神のカンバス紅葉燃ゆ  
共に老い夫は播り役とろろ汁

\* 海原を刈る台風の刃かな  
洗車機を抜け秋光の膨らめり  
\* 稲の花人に無限の可能性  
秋風に耳を澄ませば父の声  
大空に描く動線鳥渡る  
阿蘇谷を白くうねらせ花芒  
漣を広ぐる夕日秋の暮

水谷 昭代

熊本

石橋みどり

千葉

関 妙子

山本 明彦

\* 秋晴や思ひにかなふ返事来て  
一粒の張力満つる葡萄かな  
葛かづら何処へ行くにも坂ありて  
窠元は李朝の流れ初紅葉  
分け合うて刈田の畦の昼餉かな

秋の夜のコントラバスの音重し  
一陣の風の運びし秋の声  
\* 邯鄲の声透明なピアノシモ  
かなかなや一人暮しのつれづれに  
九回の点の取合ひ秋暑し

愛知

青木 幹晴

神奈川

鈴木 基之

\* 十六夜の波に隠るるオラシヨかな  
ひとつ葉にひとつ結び草の露  
地歌舞伎のもぎりに脂粉にほひけり  
野分来る門に傷負ふ一揆寺  
亡き父の菊なき庭の広さかな  
夜の帳下りて木犀香り濃し  
おしろいは普段着の花道すがら  
\* 強がり言うて寂しき男郎花  
大阪へスマホで送る今日の月  
漂泊の旅に憧れ一草忌  
\* 秋桜の風は生絹を揺らすかに  
糶果てて生簀に鯛の動かざる  
断ちきれぬしがらみもあり灸花  
盆東風やかつて勇魚の啼きし浦  
したたかに戦後を生きて盆供養

市川市

福田 肇

千葉

浜崎喜美子

千葉

里村 梨邨

栃木

五十畑悦雄

\* 仏心の闇の膨らみちちる鳴く  
山姥の落し子なりし烏瓜  
実石榴の果肉を供ふ鬼子母神  
掌中に愛づる胡桃は山の息  
無骨なる男の双手豊の秋



# 飛鷹選評



能村 研三

火を熾す 起源思はせ 葉鶏頭

伊藤 照枝

葉鶏頭は背丈ほど高く生長し、燃えるような真っ赤な葉が茎の先から垂れ下がる。その姿は鮮やかで美しい彩りを見せる。勢いのある葉は鮮烈な緋色で強さを感じる。人類が火を使い始めたのは百七十年前と言われるが、火を熾す起源は石器時代になってからである。葉鶏頭の鮮烈な緋色を見ているうちに古代のロマンに思いを馳せた。

唐茄子に 朴訥といふ 重さあり

金光 浩彰

唐茄子は南瓜のことで、主に関東で呼ばれている。ただ、「人をのしる言葉」や「間が抜けている」ことなどに使われる。「唐茄子」は「あいつもいけねえ、とうなすだよ」などと使われていた。そんなイメージを少しよく解釈すると朴訥という言葉が浮かんでくるのかも知れない。南瓜の重さは朴訥が故の重さと感じるのは面白い味方でもある。

稲光り 一瞬 街は海 の底

水谷 昭代

稲光りは雨の中でゴロゴロピカッとくる雷鳴に伴う光とは違う。遠くの夜空に走る雷光のことで、音もしないし

雨も伴わない。晴れた夜の彼方の空が突然に光るので、不思議な感興を覚える。闇の中に一瞬浮かび上がった街はまるで海の底にいるような錯覚にとらわれた。

胸筋を 真南に向け 刺羽 発つ

河寄 祐二

刺羽は鷹の仲間で、渡りを見せる鳥である。秋の渡りは九月初めに始まり、渡りの時には非常に大きな群れを作る。背は赤褐色で、腹には細かい横縞がある。南の国に向けて渡りをするときは翼と胸筋をしっかりと大きく張って力強く旅立っていく。

海原を 刈る 台風 の刃 かな

澤田 英紀

映画「鬼滅の刃」が大ヒットし、以来「刃」という言葉をよく耳にするようになった。作者は海原を渡る台風の時の荒波を「台風の刃」と表現した。この句の眼目は「海原を刈る」という措辞で、瞬間に吹き荒れる白波の凄まじさを的確に表現した。

稲の 花 人に 無限 の 可能性

石橋みどり

稲の穂が出てからしばらくして稲の花が咲き始める。とても小さく地味な花だが、やがて迎える豊穣の予兆でもある。こんな小さな花から見事な収穫が得られるのと同じように、人間ひとりひとりにも無限の可能性が隠されている。

秋晴や 思ひに かなふ 返事 来て

関 妙子

メールやSNSなど次々に新しい通信手段が登場する中、人と意志の疎通を図るには、やはり昔ながらの手紙を認めて相手の気持ちを聞くアナログの手法が良いのかも知れない。何かを訊ねて返事が返ってくるまで時間がかかるので、気が気でないが、その日の秋晴れの天気のように思いに適う返事をもたらって安堵した。